

消ちゃんの防災アドバイス（水難事故編）



第10号

平成16年7月

伊都消防組合消防本部

毎年、水のシーズンになると水難事故が発生し、尊い命が失われています。

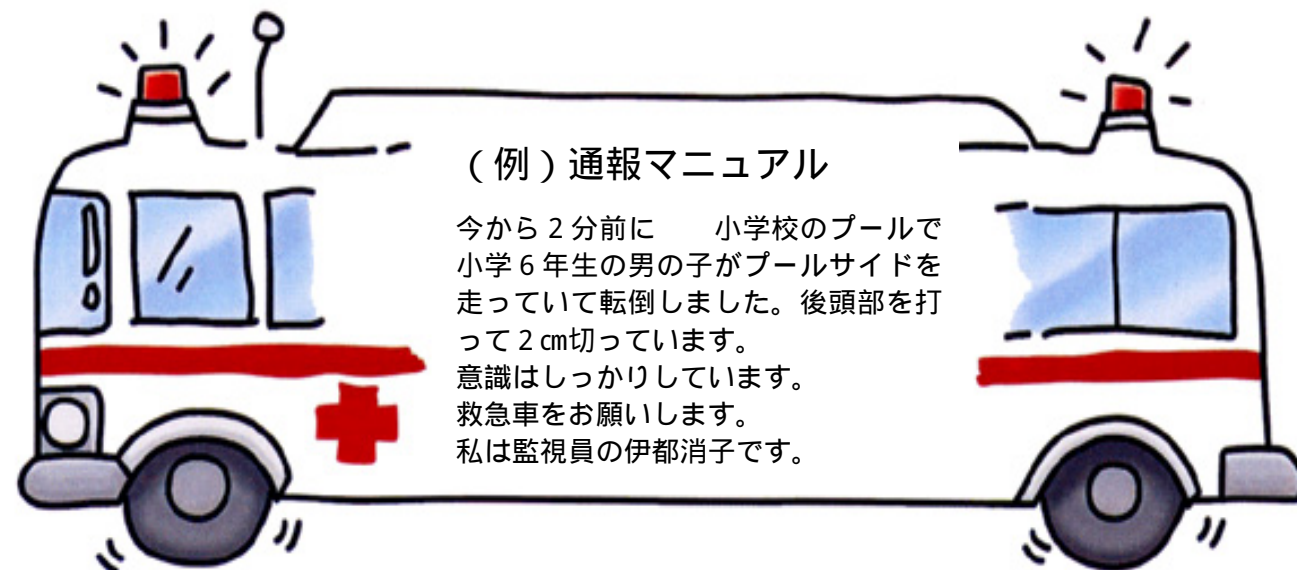
水難事故は決められたルールを守らず勝手な行動をしたり、ほんのちょっとした不注意などで起こり、大切な家族を一瞬にして深い悲しみに包んでしまいます。

今回の消ちゃんのアドバイスでは、海や河川プール等で泳がれる時の保護者（監視者）また泳ぐ人などのマナーについてアドバイス致します。水の『楽しさ』『怖さ』『ルール』を知ること、水難事故を起こさないようにしましょう。



監視者の心得

- 常に泳者の行動に気を配り、監視者であることを自覚し、泳いでいる人の大切な命を預かっていることを忘れない。
- いつでも救助できる服装で監視する。
(水着で監視するのがベストである・女性はスカートでの監視は避ける)
- 監視区域(遊泳者の人数やコース数を考慮する)を決め、監視者の目のとどかない場所をつくらない。
25mプールで6コース以上の場合には、最低4名必要と思われる。
- プールサイドは常に清掃をしておく。
- 勝手に持ち場を離れない。どうしても離れる場合には誰かに離れることを告げる。
- 救助用資器材(救急箱・救命浮環・毛布等)を整え、また遊泳前には点検すること。
(器具の取り扱い、監視者全員できるようになっておく)
- 事故発生に備えて連絡体制・通報体制を整える。
『いつ』『どこで』『誰が』『どうなったか』



泳ぐ人の心得(保護者【監視者】の言うことは絶対に守る)

泳ぐ前の注意	遊泳中の注意	休憩中・泳いだ後の注意
<ul style="list-style-type: none"> 体調がすぐれないときは泳がない 準備体操は入念に行う 急な入水はしない(心臓より遠い部分から) 	<ul style="list-style-type: none"> 泳力にあった深さで泳ぐ ふざけたまねやキケンな行為は絶対にしない プールサイド等は絶対に走らない 	<ul style="list-style-type: none"> 水温によっては泳ぐ時間 休憩時間を考慮する 健康状態をチェックし無理をしない 整理体操を行う

救助者の心得(自らの安全を考え、自信のもてる確実な方法で救助をする)

万が一水難事故が起こった場合には、救助者は後先を考えず助けには行かず、周囲の人に協力を求め早期にどんな方法で救助をするか判断し、決して溺者から目を離さず機敏に行動する。(身近な資器材を活用し出来るだけ泳がないで救助するのがベストである)

事故が起こった場合には直ぐに消防署に通報し、救助又は救急要請をする。

疾病やケガ等が起こった場合、素早く適切な応急処置を行い、軽症と思われても医師の診断を受けることをお勧めします。

水難事故の起こりやすい条件

1. 天候について

天候が悪い時に、あまり泳ぐ人はいないと思いますが、中には「せっかく来たのだから」「もう少しだけ泳ごう」などと考える人がいます。これは大変危険な行為です。

雨の場合では、泳いでいない時でも雨に濡れ体温を下げたてしまい、体力が激しく消耗されます。また海や河川は、気象条件により急激な増水で流れが激しくなったり、また波が高くなったりしますので、絶対に泳がないようにして下さい。

(注) 雷が鳴れば絶対に泳いではいけません。

2. 水温について

水温については、入水時にあまり寒さを感じなく身体を緊張させない水温(27以上が適温であるが、最低でも25以上)が良いと考えられており、水温が低い場合には絶対に泳がない。

3. 地形等について

【河川や海等】

- コケなどで転倒しないように注意する。
- ガラスや突起物のあるゴミなどに注意する。
- 足の届かない深瀬や流れの激しい場所は避ける。
- 岩などが飛び出している所での飛び込みなどの危険な行為はしない。

【プール】

- 遊離残留塩素濃度は0.4mg/以上1.0mg/以下の範囲内が望ましい。(測定は1時間毎にする)
- プールサイドは水溜りが有ると滑る可能性があるため注意する。
- 飛び込みは指定したコースで行わせる。

